

キサー・ゴータミー寸劇台本

キャスト キサー・ゴータミー

登場人 A

お釈迦様

お弟子

登場 B

登場 C

ナレーター

コーサラ国の首都舎衛城しやゑいじやうのある町に、キサー・ゴータミーという若い母親がおりました。何やら、騒さわがしい声が出てきました。様子を見てみましょう！

(ナレーター、姿を消すと同時に、若い母親、赤ん坊を抱いて登場。みんなのところに行って声をかけ回る)

キサー 「この赤ちゃんを生き返らせる方法はありませんか？一昨日おとつひまで元気でいたのです。急に冷たくなってしまったのです。何とかして下さい。お願いします。このちっちゃな手可愛いでしょ！」

(赤ちゃんを抱きながらみんなのところを回り歩く)

キサー 「この赤ちゃんを誰か生き返らせる方法はありませんか？」

(登場人 A 反対側より歩いて来る。キサーかけより赤ちゃんを見せる。びっくりしたようにキサーから離れる)

登場人 A 「うあ びっくりした。もうすでに、赤ちゃんは死んでいる。それどころか、腐敗して、死臭もただよっている。ハエも目や口の周りにびったりくっついてる。」

(キサーまた、登場人 A につきまとう。登場人 A キサーに向かう)

登場人 A 「若いお母さん、残念ながら死んだ人は、どのような方法でも、生き返ることは出来ないのです。かわいそうだが、あきらめて下さい。」

キサー 「いいえ、この世界は広いのです。誰か一人ぐらいは、死んだ人を生き返らせることが出来るはずですよ。あなたは、もう行って下さい。違う人を探しに行きますから。」

(キサーは、また尋ね歩きます。周りの人に聞いて歩く。登場人 B すみの方からキサーの様子を見ている。正面に出てくる)

登場人 B 「あの若いお母さんは、ずっと歩き回っている。赤ちゃんの死んだことをどうしても認めることが出来ないでいる。どうしたものだろう！何を忠告しても、赤ちゃんを生き返らせることのみ目が向いて他の話が一切聞くことが出来ないようだ。どうしたら良いものだろうか？そうだ、お釈迦さまなら何とかしてくれるに違いない。」

(キサー、登場人Bの所へやってくる)

キサー 「この赤ちゃんを誰か生き返らせる方法はありませんか？」

登場人B 「わしは、生き返らせる方法は、知らんが、今祇園精舎ぎおんしやうじやに来ておられるお釈迦様
ならば、その方法を知っているかもしれん。行ってみてごらん！」

(キサー暗い顔が、明るくなりお礼を言いながら、急ぎ祇園精舎に向かう)

二幕

お釈迦様、正面に座禅をしながら静かに瞑想にふけっている。そこへ弟子に引きつられて
キサーが入ってくる。

お釈迦様 「何やら騒がしい声が聞こえましたが、何事ですか？」

お弟子 「はい、ここにいる母親の我が子が、亡くなったのです。ところが、お釈迦様が
子どもを生き返らせることが出来るので、会わせて下さいと言ってしかたがない
のです。私どもは、たとえお釈迦様でも、そのようなことは出来ないとお
断り申し上げたのですが、帰らず、言うことを聞かないのです。そうこうして
いるうちに、急に走り出して、お釈迦様の方へ向かわれましたので、私どもも、
あわてて追いかけてきた次第です。」

お釈迦様 「様子は、分かりました。弟子達は、下がっていて下さい。私が直接、その若い
母親から事情を聞きましょう。ご苦労様でした。」

(お弟子は、何か言いたげな様子を見せながら下がる。お釈迦様とキサーが残る)

キサー 「お釈迦様、私は町でお釈迦様のめいせい名声を聞きました。ある方が、お釈迦様なら
死んだ子を生き返らせることが出来ると教えて下さいました。どうか、この
我が子を生き返らせる方法を、お教え下さい。」

(お釈迦様、赤ちゃんと若い母親を見比べて、少し時間をあけてから)

お釈迦様 「分かりました。そなたの子どもを生き返らせる方法を教えてあげよう！」

キサー 「え、本当ですか？いろいろな人に聞いても誰も教えてくれなかったのに！私
は、この広い世界で、一人ぐらいは生き返らせる方法を知っている人がいる
と信じていました。何でもしますから、是非教えて下さい！」

(キサー、いきいき対応する)

お釈迦様 「よく聞きなさい。これから、どこかの家に行って、ケシの種を三粒もらって
来なさい。ただし、今まで一度も葬式おこなを行ったことの無い家のケシの種だよ」

キサー 「な〜んだ、そんな簡単なことか。ケシの種は、このインドでは、どこにでも
ある植物です。すぐに見つかる。急いでケシの種、三粒をもらって、我が子
を生き返らせましょう！」

(キサー、お釈迦様に頭を下げ、お礼して立ち去る)

三幕 (キサー、ケシの種を恵んでもらおうと、けんめいに各家かくいを走り回る)

キサー 「すみませんが、ケシの種、三粒分けて下さいませんか？ケシの種、三粒で我

が子が、助かるのです。お願いします！」

(登場人C、母親の抱きかかえている赤ちゃんに、ケシの種を恵もうとする)

登場人C 「ケシの種三粒、ほうら、おまえにあげよう。これで、本当に子どもが生き返ると、お釈迦様が、仰せられたのかね？」

キサー 「はい、お釈迦様は、仰せられました。あ、そうだ！お釈迦様は、一度も葬式を行ったことのない家と言っていました。このお宅は、葬式を行っていませんよね！」

登場人C (顔の前で手を横に振りながら)

「残念だが、昨年、私の母親の葬式を行ったばかりだ。おまえの言ったような家ではない。だから、うちのケシの種では、だめだよ！」

(キサー、うなだれて次の家に向かう。あう人、あう人、手を顔の前で振り、ダメ、ダメのポーズをとる。登場人D, E)

ナレーター

「家を訪ねまわるうちに、母親キサー・ゴータミーは自分が忘れかけていた大切なことに気付かされました。それは、今まで葬式を行わなかった家などは、無いのだということ。すなわち、この世に生まれたかぎり、必ずいつかは死んでいかなければならないということです。このことに目覚めたキサーは、もう二度と生き返ることのない赤ちゃんに何か静かに語りかけています。聞いてみましょう」

(ナレーターしずかに、去る。うちろからキサーあらわれる)

キサー 「坊や、ごめんなさい。あなたを生き返らせる薬は、見つからなかったわ！でもお釈迦様にお礼を申し上げに行きましょう！坊や、お母さんに大切なことを教えてくれて有り難う！」

(キサーしずかに、お釈迦様と言って去る)

終わり